



人権・同和教育だより *2学期編

平成26年12月25日

体育祭、翔陽祭、県外企業視察など行事の多い2学期でしたが、合い間をぬって、10月17日に研究授業と教職員研修、12月5日に地球のステージの公演を行いました。今回はその様子をお知らせします。

♣ P T A 今学期の活動から

P T Aの方には、とくに12月5日に本校で実施された「地球のステージ」でお世話になりました。このステージは、生徒・教職員だけでなく、保護者の方にも人権問題について考えてもらおうと企画されました。しかし、当日が金曜日で、保護者の方に来ていただけるのか？という問題に、われわれは頭を悩ませていました。

…ところ、P T A会長さんから、ホームページでの宣伝や緊急メールでの呼びかけをしたらどうかと、ご意見をいただき、ご自身もさっそくチラシを持って帰られ、呼びかけを行ってくださいました。また当日、雪のため到着が危ぶまれた生徒育成委員会会長の水津さんも、無事に会場に到着され、公演された桑山さんにお礼の言葉を述べていただきました。

公演を聞かれた保護者の方のうち、4名の方が公演後の懇談会にも参加され、桑山さんからさらに深い思いを伺い、ステージの感動とともに、ご家庭に持ち帰っていただいたのでした。そのときのご感想です。

- ・「人と比べるのではなく、前の自分と今の自分を比べろ」という言葉がとても印象に残りました。自分をゆっくり見つめ直してみます。
- ・人権問題についての講演会に参加する機会が何度もありましたが、ここまで話に引き込まれたのは、初めてだと思います。桑山さんのお話は実体験に基づく内容で、保護者や教職員だけでなく、生徒も考えさせられ、将来の夢や生き方について学べたのではないかと思います。
- ・学校から帰った子どもに聞くと、とても感動していたらしいので、正直安心し、会場のみなさんがとても良い人たちばかりに思えてしかたありませんでした。「息子たちよ！顔をあげてチャンスをつかめ！」今日の出会いに感謝です。

◆生徒の感想は…

- ・被災地のことを見ると、自分らの悩みってちっぽけだな、前向かないとだなんて思いました。この公演で視野が広がって世界を見渡した気分になったし、一つひとつの大切さを感じました。
- ・津波で子どもを亡くしたお母さんが、「私が生きてごめん」と言った言葉は胸に響きました。親より子が先に死ぬことは悲しいことだと思いました。
- ・“苦しいことがあっても必死で生きる”今日の公演で心に残った言葉です。自分は今あまりにもついてなすぎて、萎えています。涙のあとには笑顔があると信じて生きていきたい。

◎私もこの度初めて「地球のステージ」を見ました。やはり東日本大震災の場面が、いちばん心がぐうっとなりました。また映像を見ていて、3年生の授業で今夏のガザ空爆について取りあげたことを、生徒は思い出してくれたのだろうか？と思いました。徹底的に町を破壊するすさまじさは、津波による被害とは似て非なるもの、怨恨の連鎖の恐ろしさをまざまざと感じました。そして、部落史学習で出てくる解放令後の農民の豹変した心理と、合い通ずるものを感じました。桑山さんのステージが私たちを引き込むのは、“同じ目線”に立たせてくれるから。すなわち、まるで自分がパレスチナや東ティモールにいるかのように感じさせてくれるからではないでしょうか。相手の立場に立つ想像力の大切さが人権問題解決の糸口ではないかと思いました。

♣ 人権・同和教育研究授業

10月17日(金)の5、6時間目に人権・同和教育についての2学期のHR活動が実施されました。1年生は「気持ちの伝え方」で色々な場面を実際に演じながら、アサーティブな受けこたえについて取り組みました。

2年生は「差別はなぜ残ったのか(1) 解放令から考える」として、解放令がもたらした差別心の残虐性について考えました。また3年生は、職業人としての心構えとともに、職場のハラスメントへの対処について考えました。以下は生徒の感想です。

<1年生>

- ・自分の考えをはっきり言うと相手が落ち込み、はっきり言わないと自分の気持ちがすっきりしない。
- ・どんな言葉を言われると反省するか、日ごろ言っている言葉を自分が言われるとどんな気持ちになるか知ることができた。
- ・感情を表に出すと相手が怒ってしまうかもしれないが、出さないと自分の気持ちが解決しない。自分の言葉を考えて使いたい。
- ・相手のことも考えつつ、自分の意見もしっかり言う。

<2年生>

- ・解放令というと平等になっていいことだと思ったけど、全国で差別が悪化していてとても驚いた。今では差別は目立たなくなっているけど、完全にはなくなっていないので、少しでも平等に近づけていけたらいい。
- ・部落の人の気持ちも農民の気持ちも知れてよかった。解放令反対一揆の被害がすごかったのでびっくりした。
- ・難しかったけどよく分かった。差別する人は、差別されている人の気持ちが分からないほど、差別することしか頭にないのかと思った。
- ・一度差別意識にのめり込めば、本当に残虐なことが普通にできてしまうことを学び、怖いと思った。自分で正しさを適切に判断していけるようにしたい。

<3年生>

- ・仕事のキツさは選べませんが、おかしいと思ったらひとりで考えないで周りに相談して考えたい。
- ・会社は期待や投資の意味も込めて新入社員に給料を払っているのだから、自分も頑張らないといけなない。
- ・ハラスメントは他人事ではなく、そういうものがない社会や企業を作っていかなければならない。
- ・今までは、職場体験やアルバイトで働いたつもりになっていたが、就職して働くとは全然違うと思った。

♥今学期を終えて…

今年度人権・同和教育担当者となり、種々の会議や講演会などに出る機会がありました。同和問題・人権問題という一見難しく、敷居が高いように思われるかもしれませんが、私は参加する度に、「ああそうか！そういうふう考えるんだ。来て良かったな。」と、毎回お土産をもらって帰ってきています。それを直ちに皆さんに還元できないのが課題なのですが、今年の締めくくりに、もっとも嬉しかったお土産についてご紹介したいと思います。

先日の会議では、高津地区の小学校・中学校の先生や公民館の方とお話する機会がありました。そのときに、総合学科の益田養護学校との交流、生物環境工学科の高津小との花育活動や、電子機械科の高津中への出前授業など、各科の地域交流をたいへんほめていただき、翔陽高校の者としてたいへん嬉しく思いました。なかでも、電気科が高津地区でおこなっている電気機器等の清掃活動について、「とても楽しみにしていて、毎年予約される方がおられますよ。」と言われ、専門を生かした各科の地域交流がしっかりと地域に根づき、本校を支えているんだなあと改めて気づきました。生徒たちも異世代間の直接的な交流をとおして、大きく成長していることでしょう。そして、これらの活動も十分に人権・同和教育といえます。

これからも専門学校ならではの特性を生かした人権・同和教育をみざすとともに、各科のすき間を埋める人権・同和教育を考えていくのが担当者の仕事なのだと思えてきたのでした。(有)

